



物語の話



川崎ゆきお

「私は物語があまり好きではない」

「はい」

「嫌いではないがね。好きでもない。その程度のものだよ」

「いろいろな事柄には物語がありますねえ」

「その事柄をやっているときは、まだ物語にはなっていないだろう」

「はい、物語はあとで語られるのですかね」

「まあ、それは解釈だ。だから、都合のよいように作られる」

「でも、事実関係は動かさないでしょ」

「どの事実を入れ、どの事実を入れないかで、違ってくる。当然語り方でも違ってくる」

「たとえば」

「中学生が自転車で東海道五十三次を走った」

「はい」

「冒険談だね」

「そうです」

「しかし、見方を変えれば青少年問題云々の対象にもなるだろう。さらに精神的な面からの物語もある。これは冒険ではなく、一種の非行だと。家に居たくなかったとか、危険なことをして目立ちたかったとかね。その中学生は自転車に幟を立てていた。東海道自転車旅とね。これで、この少年は物語の方向性を自分で演出した。単に東海道を走るだけなら、静かに走ればいい」

「違ってきますねえ。物語のジャンルが」

「それを見ていた人は、一人一人解釈が違うだろう」

「自転車好きなら、車種が気になります。そういう長旅用の自転車があるんです。ハンドルが二段になっていたりします。当然荷物が積めるような仕様になっています。スポーツ車でありトラックなんですね」

「詳しいねえ」

「いえ、僕も自転車で遠乗りしますから」

「あ、そう」

「それで、物語の話なのですが」

「ああ、そうだったねえ。何でもかんでも物語にしてしまう。これが気に食わん」

「では、どう言うのがいいのでしょうか」

「勝手な解釈や、理屈付け、理由付け、都合の良いように話していく。これがどうも胡散臭い。まあ、ドラマなら良いんだけどね。現実の出来事を物語のように語ったりするのが、気に食わんのだよ」

「気持ちが食べたくないのですね」

「え、気に食わぬとはそういう意味だったか」

「さあ」

「まあ、いい」

「はい」

「良いようにも作り換えられる。作る側のさじ加減でね。いや、意図だろう。その方が都合が良いからだ。綺麗な物語は危ない。そう言うことだ」

「美談などもありますねえ」

「いや、美談と断りが入っていると、もう駄目だ」

「もう、涙が出て来ますか」

「いや、最初から美談なので、見ない、聞かない」

「どうしてですか、いい話ですよ」

「それが気に食わん」「

「また、気持ちが食べたくないと言っているのですね」

「そんな美談に乗るものかと思う」

「あ、はい」

「美談にした根性が気に食わん。別の視線から見れば悪談かもしれんぞ」

「あ、悪談ですか」

「まあ、いい。そういうことは。それより、美談後の話が聴きたい。一度美談で治まると、その後はどうなる」

「メデタシメデタシで過ごすのでしょ」

「美談を成立させた人物、たとえば、人を助けた人だとする。その人はそこでは助けたが、他では助けなかったかもしれん」

「そんな、ひねくれた」

「現実はそうできておる。物語のようにはいかん。全てのことを語ることもできないので、省略が多いし、物語にふさわしくないところは話さない」

「では、どう言うのがいいのでしょうか」

「自分自身の物語を思えばよい。歴史書と同じで、今が基点だ。今に都合の良いように語られる。当然今は未来に繋がる。これは何処から出て来ておる」

「ああ、その方がいい感じになるからでしょ」

「人は欲深い」

「はい」

「終わりじゃ」

「え、結論はそれですか」

「それ以上語ると、わしの物語を披露することになる。そんな野暮な真似はしとうない」

「あ、はい」

了